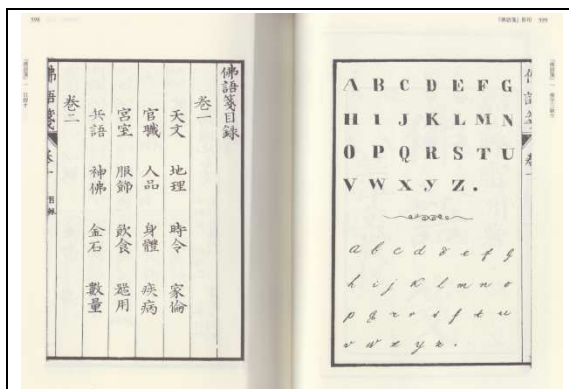


2年前にイスラエルをご一緒に旅行した田口さんと何度かメール交換をして、言語学の研究者であり、国際バカロレア機構(1968年、チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムとして、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入学資格(国際バカロレア資格)を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として設置。)の教員、試験官をなさっていたことを知りました。言語教育プログラムは高く、深く、広いものでした。田口さんは日頃から、「言葉は心のかがみ」と仰って、言語表現の大切さを述べておられます。偶然、高校が同窓で、1年先輩であることを知り、尊敬と共に、親愛の気持ちが高まりました。

昨年秋に研究をまとめて『佛語箋 研究・索引・影印』を刊行されました。この研究は高く評価され、2016年度の「高橋邦太郎・日仏文化賞」奨励賞を受賞されました。門外漢の私にも一冊贈ってください、「猫に小判」のようで、恐縮しました。立派な装丁の御本で、索引部分が日仏両方からで、分かりやすく、当時の木版印刷の影印が印象深く、大切にページをめくって、眺めては悦に入っています。

「佛語箋」は幕臣であり、画家であった加藤雷洲(1833-1895)により、1870年(明治2年)頃にはすでに出版されていたと思われる、一般の人々向けに編まれた3174語が収録されている和仏単語集です。当時、オランダ語はもとより、日本は開国によって、英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語など、外国語を学ぶ必要に迫られました。数種の「~箋」が出版されていますが、文字の字形の変更、振り仮名の変更、意味の違いがあるとのこと。これらは研究者にとって、興味深いものなのでしょう。私にとっては、江戸期のフランスとの関係、印刷技術などは未知のものでしたから、興味をそそられました。と同時に、一種の辞書ですが、その引き方が現在と違っていますから、驚きがありました。



影印は圧巻です。まず、アルファベットの活字体と、流麗な筆記体が記されています。片仮名でアー、ベー、セイと読み方が付いています。目録で、30以上の項目に分類がされています。各項目に、漢字が縦書き、その下にフランス語が横書きで記され、それぞれに片仮名で振り仮名が付いています。その字体が木版によるものとは思えないほど流麗で美しいのです。けれども、語の並び方はアイウエオ順でも、abc順でも、いろは順でもありません。大から小へ、という感じでしょう。

うか。例えば、巻一の一、天文の項では「天地開闢」Chaosに始まり、80以上の現象について述べ、最後は「烟」Fumeeで終わっています。官職の項では「帝」Empereurから「厠ヲ掃除スル人」Cureurで終わっています。この語の並び方は当時の意識が反映されていると思わずにいられません。大半は名詞ですが、巻二の最後に、陪名詞(形容詞)、附詞(副詞)、前置詞、附合詞(接続詞?)、動詞の順となります。動詞は526語と、数が多いですが、漢字で記され、振り仮名がされています。当時の文書は漢文が多かったのでしょうか。不思議なのは兵語の項には250語以上もあることでした。聞くとところによれば、日本の陸軍はフランス式に学んだということですし、富国強兵の時代では、軍隊用語は日常的だったのかもしれませんが。そして、あとがきで書かれているように、「近代の黎明期に日本語の文字や文化が変化していく過程の証…洋語を取り入れていくその道筋を辿る機会」だと感じています。

キリスト者としては巻一の最後ごろにある神佛の項に目が行きました。「神」はDieuとあり、「佛」はIdoleでした。ギリシャ神話の神々が多数記されているのには驚きましたが、キリスト教独特の用語

カミトナリシト 神人 Sauveur、ゾウブツシヤ 造物者 Createur、イキカヘル 蘇生 Resurrection、テンヘンボルゴト 登天 Ascension、ゲダツルヒト 化脱人(贖い主) Redempteur  
 が載っていることは興味深いことでした。初めて目にした幕末のキリスト教の言葉でした。感謝です。